

金玉均の亡命に対する日本社会の認識と対応

韓 成敏（大田大学）

【発表要旨】

金玉均を中心とした急進開化派は、1884 年 12 月 4 日に甲申政変を起こしたが、清国軍の介入でわずか 3 日で失敗に終わって、かれらは日本に亡命した。彼らは近代の日本社会が受け入れた最初の政治亡命者だった。

亡命以来金玉均の行動は常に朝鮮・日本・清国政府の関心事であり、「金玉均の引渡問題」は重要な外交争点だった。日本における金玉均に対する処遇は日本政府の閣議決定により行われた。したがって亡命後の金玉均の活動と関連した研究は甲申政変以後の韓日関係または東アジアの国際関係を把握するうえで重要な意味を持つ。

金玉均をはじめとする朝鮮人亡命者たちは本国からの相次ぐ暗殺の脅威に悩まされた。そして日本政府は、甲申政変との関連を否定し、金玉均らを政治的に支援するどころか、亡命者として待遇しなかった。しかし、日本の新聞の報道などにより日本社会の反朝鮮・反清国の感情を刺激し、開化派を「日本党」と称するなど、金玉均らは日本の民間社会からは大きな同情と支援を受けた。その後、朝鮮人亡命者は日本社会で大きな関心の対象となった。

金玉均が日本に亡命していた時期は、日本が欧米との不平等条約の撤廃に多大な努力を傾けていた時期だった。亡命者金玉均の存在は、日本の欧米化・文明化を測る尺度のようなものであった。本研究は近代日本社会が金玉均を中心にした朝鮮からの政治亡命者をどう認識し、また対応したのかを明らかにしたい。

【略歴】

学歴 東国大学校史学科学士

東国大学校一般大学院史学科修士

東国大学校一般大学院史学科博士

経歴 2006 年 3 月～2014 年 12 月、東国大学校講師

2009 年 9 月～現在、大田大学校講師、講義専担教授

2009 年 2 月～2014 年 2 月、東国大学校対外交流研究院研究員

2012 年 1 月～2013 年 8 月、韓国外国語大学校講師

主要研究論著：

「開港後（1882～1894）における清国の治外法権行使と朝鮮の対応」『韓国近現代史研究』第 43 号、2007 年 12 月

「乙巳條約以後、韓清間における治外法権研究(1906～1910)」『韓国近現代史研究』第 46 号、2008 年 9 月

「日本政府の安重根裁判介入とその不法性」『史学研究』第 96 号、2009 年 12 月

「倉知鐵吉の「韓国併合」計画立案と活動」『韓国近現代史研究』第 54 号、2010 年 9 月

「皇室特派留学生の同盟退校運動に対する日本の対応」『歴史と現実』第 93 号、2014 年 9 月

「第 2 回ハーグ万国平和会議の特使に対する日本の対応」『韓日関係史研究』第 51 号、2015 年 8 月

「乙巳條約以後、日本の「韓国併合」の過程研究」博士学位論文、2016 年 8 月

「日本政府の「韓国併合」実行計画の樹立過程：「倉知案」と「秋山案」の比較を中心に」『日本歴史研究』第 47 号、2018 年 6 月

「亡命者・金玉均に対する日本政府の処遇と朝鮮政策（1884～1890）」『歴史と現実』第 109 号、2018 年 9 月